

彼は、もっと違った。親指の腹で包皮を剥いて、赤い核を露出させてから、左右にゆっくり転がした。時々、爪の少し上の柔らかいところで弾く。円を描く速さも、押す強さも、私の指より正確だった。思い出そうとして、同じ動きを真似する。上、下、円。核の頭だけを、小さく撫でる。気持ちいい。なのに、届かない。

「……そこ」

喉の奥で、声にならない言葉が溶けた。そこ、は、彼の指が入る場所だった。彼はクリトリスを転がしたまま、中指を入り口へ沈めた。浅く入れれば抜き、濡れを確認してから、第二関節まで。中の上の方を、手前に搔く。あの角度。あの深さ。思い出すだけで、今の内側がきゅつとすばむ。自分の中指を、入口へ当てる。ぬるりと、浅く入った。自分の熱と、自分

の濡れだけが指に絡む。第一関節。第二関節。根元近くまで沈めて、上壁を搔こうとする。違う。角度が、違う。彼の指はもつと太くて、入った瞬間から内側を押し開いた。搔く位置も、もう少し手前で、もう少し強い。私の指では、そこまで届かない。届いているつもりなのに、熱の芯が一つずれる。腰を浮かせても、あの場所には当たらない。

口を押さえた手の下で、息が乱れた。隣の寢息は、変わらない。その平らかな音が、余計に寂しかった。こんなに近くにいるのに、こんなに触れているのに、彼の熱はどこにもない。重さもない。視線もない。あるのは、自分の細い指と、乾ききらない記憶だけだった。昔、彼は私の耳の後ろに口を寄せて、「ここ、弱いよな」と言いながらクリトリスを吸った。舌先で核の頭だけを叩いて、小さい突起を口に含んで引っ張った。その熱

を思い出して、自分の指を速くする。円を小さくして、核を潰す。中の指も、抜き差しする。ぬちゃ、と小さな音がした。自分の耳にだけ聞こえる音なのに、彼にバレそうで怖かった。なのに、止められない。腰が、勝手に動く。指に擦りつけるように、小さく上下する。彼に抱かれていた夜を、頭の中で再生する。

先っぽだけを入口で遊ばせて「感じる。今、先っぽだけだ」と言われた熱。根元まで一気に入ってきた重さ。一番奥に当たったときの、甘く痛い突き上げ。全部、思い出しているのに、今の指はどれも再現できない。

「……っ」

声を殺して、眉を寄せる。目の奥が熱い。気持ちいいのに、足りない。